

〈論文〉

アフロ系ベネズエラの捉えにくい民族境界

石 橋 純

はじめに

ベネズエラはラテンアメリカ有数の混血国であると言われる¹⁾。この国の「人種」構成について、一般に受け入れられている数字を挙げるならば「混血約70%、ヨーロッパ系約20%、アフリカ系約9%、その他（先住民、東洋系、アラブ系）若干」となる²⁾。「混血約70%」の中にも多かれ少なかれ「アフリカ系」の要素が含まれることになる。

実際、自己の「人種」アイデンティティを表明する際に「私達ベネズエラ人はカフェ・コン・レーチェなのだ」という民俗表現は現代ベネズエラにおいて頻繁に使われる。ベネズエラというカップの中では、ミルク（白人）とコーヒー（黒人）は混合して分離不可能というわけである [Wright 1993]。見方によればベネズエラは「ラテンアメリカ有数のアフロ系混血国」でもあるのだが、「黒人中心主義」的傾向を持つ文献 [Minority Rights Group 1995: xiii] ですら、全人口に占める「アフロ系グループ」の構成比として「9%~70%」という捉えどころのない数字をあげている。ベネズエラにアフリカ人の子孫が住んでいることは疑いようもないのだが、その「民族境界」³⁾を把握するのは容易ではない。

本稿の目的は、このように境界の見定めにくいアフロ系ベネズエラの民族範疇について「文化」と「社会」の両面から考察することである。論点

の一端を先取りしておこう。ベネズエラは、「先住民」「ヨーロッパ系」「アフリカ系」という3つの民族集団が、4世紀以上にわたって形質的混血ならびに文化的混淆を継続してきた社会である。土地っ子は「土着のベネズエラ人」を表す「名乗り」⁴⁾として、「クリオージョ」criolloという自称を用いる。クリオージョの肌の色には、いわゆる「黒」から「白」まで無限の階調が存在する。

クリオージョ文化の中で「アフリカ起源が想定される事物」について、「黒人系」negro(a)と形容する習慣は現代ベネズエラにおいて一般に見られる。しかしそのような事物が帰属する集団は、実際には様々な肌の色の人が集まる「クリオージョ集団」であって、その成員は第3者から見て肌の色の黒い人だけに限定されない。つまり、「黒人系」という用語で指示される文化的象象と、その担い手の形質的特徴との間には、ズレが生じているということである。

そこで本論では、分析概念として混乱を招きやすい「黒人」という表現をしりぞけ、「アフロベネズエラ」という用語を用いることにする（縮約する際は「アフロ」とする。）その含意は「アフリカ起源と想定されるベネズエラ土着（クリオージョ）文化に帰属する」ということである。「アフロ系集団」という表現をとる場合、そこには様々な肌の色の人々が含まれることを前提とする。論述中、肌の色に言及する必要がある場合は、煩雑ではあるが、「(第3者から見て)肌の色の黒い人」と表現する。文中に登場する「黒人」はすべて引用であり、それゆえ必ず「」で括る。「アフリカ系」という表現は用いない。この用語は本来、アフリカとの直接の関連を有する事項を表すために使用すべきであると考え⁵⁾。

本稿は以下の構成をとる。第1章では、土着化し、混血アイデンティティに包摂されているがゆえに捉えにくい、アフロベネズエラの「民族境界」について素描する。第2章では、ベネズエラにおいてアフロ系集団が形成され、広範な混血層に拡散・融合していった19世紀までの歴史を概観し、さらに20世紀においてアフロ系文化が再評価され、大衆文化として立

ち上がる過程を略述する。第3章ではアフロ系文化復興運動に関する民族誌 [石橋 1998] に基づき、個別事例の中で論点を検証する。

I 「カフェ・コン・レーチェ」——土着化した混血アイデンティティ

「人種」という概念が客観的・科学的なものとして存在しえないことは、現代の社会科学・自然科学の常識である。冒頭に挙げた統計のように、この用語を使って人口分布を記述しようとするれば、たとえどのような社会集団であっても、その輪郭は不明瞭にならざるをえない。しかも範疇画定の妥当性を議論する以前に、近現代のベネズエラには、「人種」「民族」に関する人口動態を俯瞰するための基礎資料が、そもそも存在しないのである⁶⁾。公的センサスにおいても、1873年の第1回国勢調査以来、「人種」あるいは「民族」による区分は設けられていない [www.ocei.gov.ve]。

例外は先住民ならびに海外からの新移民である。新移民については、国勢調査において「海外出生者（ベネズエラ国籍の両親を持つ者を除く）」として、公式に把握されている [www.ocei.gov.ve]。先住民のセンサスは国勢調査とは別体系で行われている⁷⁾。これらの事実は、現在ベネズエラ国家が、誰を「内なる他者」と「名づけ」ているかを端的に示している。

一方、「アフロ系」という範疇の不在は、たんに公的センサスにとどまらない。アフロ系集団の、アフロ系集団による、アフロ系集団のための排他的共同社会・民族協議会・政党・労働組合・教育機関・社交クラブ・マスメディアなどが設立・運営された事実は、ベネズエラ史上存在しない [Wright 1993]。現代ベネズエラにおいても同様に、たとえ小規模の私的集団であれ、その成員資格に「アフロ系であること」「黒人であること」をうたう例を発見することは、おそらく不可能と言えるだろう。「黒人」あるいは「アフロ系」という民族境界を自覚的に保持し、そのような「名乗り」をもって他者との相互関係を理解するマイノリティ集団は、近代以降のベネズエラには存在しないのである。

こうした点に着目した社会学者ゴンサーレスは、ベネズエラにおける

「民族の大枠」macro etnia を「クリオージョ集団」「先住民集団」「バイナショナルーバイカルチュラル集団」⁸⁾の3区分によって捉え直すことを提唱した [González 1991: 128]。ここで言う「クリオージョ集団」の中には「アフロ系」「ヨーロッパ系」「先住民」という3要素が、すべて「混血」という人種的・民族的プロトタイプに包括される。総人口の約50%強がこの集団に属するとされる。ゴンサーレスは、クリオージョ集団の歴史的形成過程をおおよそ次のように説明する。

15世紀から19世紀の期間に起こった征服、植民、奴隷貿易、独立闘争、共和国形成という歴史を通じて、「ヨーロッパ系」「アフロ系」「先住民」の3集団は、不均衡な権力関係の下、「混血文化」を形成した。それは、ヨーロッパ系集団が、先住民ならびにアフロ系集団に対して、苛烈な政治的・経済的・文化的強制を実行してきた過程であった。そこでは弱者は「抵抗」や「選択」という手段よりも、「受容」することによって、「混血」のエスニシティ形成に関与してきた。こうして鑄造された「混血の国民像」は、19世紀以降、近代的国民国家の構築過程において「国造りの主役」の位置を与えられた。その結果、現代ベネズエラ社会において「混血のクリオージョ」というナショナル・アイデンティティが共有されるに至った [González 1991: 136-137]。

こうした視点からクリオージョの民族境界を素描すれば、次のようになるだろう。現在ベネズエラにおいて「生っ粋のベネズエラ人＝クリオージョ」と「名乗る」人々の中には、「漆黒の肌を持つ」と形容される、アフリカ的な容貌の人から、金髪・碧眼のヨーロッパ的外見の人まで、切れ目ない混血の階調が存在する [Chacón 1983: 39-44]。クリオージョ達は、「人種」「民族」概念として「白人」「黒人」という意識を持たず、「私達は皆混血なのだ」という意識を共有している。つまり、アフロ系を基層のひとつとした混血国でありながら、その中に自律的・排他的なアフロ系集団が存在しないというのが、ベネズエラ社会の基本的特徴なのである。

では、現代ベネズエラ社会において、現実使用される negro あるいは

afrovenezolano という用語は、何を指示しているのか。それは、「文化的範疇」といえる [Chacón 1983:45]。ベネズエラの国民文化 *cultura nacional* あるいは民俗文化 *cultura popular* の下位カテゴリーとして、「アフロベネズエラ文化」*cultura afrovenezolana* という「名づけ」は存在している。学制的言説の中では、afrovenezolano という用語を使ってベネズエラ文化における「アフロ系混血人によって伝えられた要素」を同定することが一般的である。negro は afrovenezolano に相当する、一般的・大衆的な用語である⁹⁾。

ベネズエラ文化において、アフロ性をもっとも強く表現されると考えられるのが、民衆カトリシズムにおける聖人信仰儀礼である [Domínguez 1969, Liscano 1973, Fuentes y Hernández 1988]。とりわけ儀礼にともなう太鼓の宴はアフロ性の象徴であると考えられている。もっとも、「儀礼にともなう太鼓の宴」という表現は、西欧近代的分節法である。地元の人々は楽器・リズム・歌・舞踊・奉納芸・宴・祭りのすべてを「タンボール」*tambor* という一語の中に含意する。楽器としての「太鼓」だけを意味する標準スペイン語の用法とは異なり、きわめて包括的な概念となっている。

ベネズエラにおいて、誰もが「アフロ系」と認識する文化的要素は、聖人信仰儀礼における太鼓芸能すなわち「タンボール」である。人類学者チャコンは、ベネズエラにおいて「黒人」集団を無条件に想定する言説を批判した上で、「特徴的な民間信仰と〔太鼓をともなう〕儀礼に着目する以外に『黒人』ないしは『アフロ系ベネズエラ人』集団を特定する方法は存在しない」と述べている [Chacón 1983:45]。ベネズエラ社会におけるアフロ系集団を、あえて定義しようとするならば、「タンボールの文化に自己同一化する人々の集団」と表現することも可能であろう。

II アフロ系ベネズエラ文化の軌跡

1 アフロ系集団の「白色化」

ベネズエラにおけるアフリカ人奴隷の導入は、16世紀初頭に開始された。

植民地期のベネズエラ社会は、アメリカ大陸の他地域同様、「カスタ制度」 *sistema de castas* と呼ばれる「人種」による身分秩序と分離政策によって管理される原則であった [Acosta 1967: 309-312]。ところが、辺境の植民地であったベネズエラは17世紀末まで、経済的にきわめて不安定であった。恒常的な人口不足や入植地の盛衰により、社会は安定しなかった。このため寡頭支配者層を除いては、カスタ制度に反して、早い時期から混血が進んだ [Ferry 1989: 13-19]。18世紀に入ると、バルド *pardo* (有色人) と呼ばれる混血自由人層が住民の多数を占めるようになった [Brito 1979: 164-166, López 1988]。

18世紀初頭、カカオ・ブームにより、ベネズエラに史上初めて輸出向け大規模プランテーション農業が確立した。カカオ農園の集中する中央海岸地方の熱帯低地には、大量のアフリカ人奴隷が短期間に導入された [Brito 1985: 114-116, Ferry 1989: 120-129]。18世紀の末、カカオ・ブームは早くも終焉を迎えた。代替作物として導入されたコーヒー農業はじゅうぶんに展開されず、奴隷労働力の余剰化を引き起こした。このため奴隷の中には農村から都市に売却され、家内奴隷となる者が増加した。また、貢納と引き換えに商品作物の耕作を許可され、現金収入を得る「小作農的奴隷」も出現した。こうした経済力を背景に奴隷が自らの手で自由を買い取ることも行われるようになった。かくして19世紀初頭には、プランテーション経済と奴隷制は、内側から崩壊に向かったのである [Acosta 1967: 342-347, Lombardi 1971: 135-142, Brito 1985: 281-294]。

一方、16世紀からすでに見られた奴隷の逃亡や組織的反乱は、18世紀に一段と激化した。この時期、植民地社会は都市と農園という表の社会と、裏の逃亡奴隷コミュニティ（「クンベ」 *cumbe* と呼ばれた）という2つの社会が併存するかのようであった [Brito 1985: 205-243, Acosta 1967: 263-292]。裏の世界の「人種」構成は表の世界に劣らず複雑で、「黒人」、バルド、インディオ、そして貧困白人層も含まれた。裏社会は密輸により経済基盤を築き、時に応じて組織的反乱を起こして表の社会を脅かした

[Acosta 1967:297-306]。

19世紀初め、独立戦争が始まると、独立軍、王党派軍ともに、自由身分の付与を条件に「黒人奴隷」から兵を募った [Brito 1985:253]。農村経済は荒廃し、奴隷制は危機に陥った [Lombardi 1971:91]。独立宣言とグランコロンビア共和国成立 (1819年)、ベネズエラ共和国の分離 (1830年) を経て、段階的に進退をくり返ししながら、奴隷解放が適用されていった。1854年、ようやく奴隷制廃止が宣言されたが、この頃には人種に基づく身分制度はすでに有名無実化していた [Lombardi 1971:135-142, Brito 1985:402-415, Aizpurua 1988]。独立後の社会的混乱もあいまって、解放された元奴隷達は、広範な混血層の中に急速に拡散していった。ベネズエラは19世紀末には軍部を筆頭として、支配階級にさえアフロ系「有色人」が進出する社会となっていた [Wright 1993:60-68]。

1920年以降、ベネズエラは産油国に転換した。このため近代化と都市化の波が一気に押し寄せた。独裁者ゴメス (1857-1935年) の死後、リベラルな政治環境が実現すると都市への人口流入が爆発し [Chen 1968:28]、アフロ系有色人の社会的可動性はさらに高まった。ベネズエラ社会の民族境界は、いっそう曖昧なものとなった [Wright 1993:97-102]。

アフロ系集団の社会的統合にともない、形質的混血ならびに文化的混淆も進んだ。この過程は、アフロ系文化の住民各層への拡散を生むと同時に¹⁰⁾、アフロ系集団が、西欧・近代型文化を進んで取り入れるという帰結をもたらした。すなわち文化混淆は、アフロ系、ヨーロッパ系の双方向から促されたのである [Acosta 1980:266-273]。

混血と文化変容を意図的に押し進め、ベネズエラに存在する「黒人」を「白人」に近づけようという思想が、19世紀末の支配者層に形成されてゆく。実証主義・進化主義の影響下、近代国家の建設を企図した知識人は、国家の進歩のためには国民の「人種改良」 *mejoramiento de la raza* が不可欠であると考えた。混血を進めることにより、「未開」の象徴である「黒人」の痕跡を国土から消去することが望ましいとされたのである。こうし

た傾向は「白色化blanqueamiento思想」と呼ばれる [Wright 1993:44-68]。

形質的混血、文化的混淆、さらに「白色化思想」に基づく啓蒙主義の帰結として、ベネズエラ文化は、他のアフロアメリカ文化との比較の上では、より「脱アフリカ化」していると言われる [Liscano 1973:36-40, Megenney 1995:245]。言語学者メゲニーは、ベネズエラ海岸地方の方言を調査し、「カリブ海地域の黒人系スペイン語方言の中でも、標準スペイン語にもっとも近づいた事例」と位置づけ、言語変化の環境要因として、アフロ系集団の文化混淆と社会統合の進行を指摘する [Megenney 1992]。先述のとおり、民衆カトリシズムの聖人信仰儀礼においては、アフロ的要素が強く表出される。しかしアフロベネズエラ系聖人信仰の神学的枠組みは、世界各地の民衆カトリシズムと多くの点で共通している。祈祷のテキストや神霊世界の序列（パンテオン）に、アフリカの要素がありありと見られるハイチのヴォドゥン [Maximilien 1945] やキューバのサンテリア [Murphy 1993] などの民衆宗教と比較すれば、ベネズエラの事例は相対的にアフリカ色が薄いと言える [Liscano 1973:30-35]。

2 国民文化の「黒色化」

19世紀後半、新生国家のアイデンティティ表象となるべき、「固有の文化」創造のため、アメリカ大陸に知的情熱が渦巻いた。先史文明や先住民文化あるいは植民地期に培われた民俗を対象とした研究活動が各地で興隆した。ベネズエラにおいてまず開花したのは、「コストウンプリスモ」costumbrismoと呼ばれるロマン主義的民俗随筆であった。ベネズエラ国民の理想的原形として平原の牧童＝ジャネーロ llanero というペザント像が立ち現れてくるのはこの種の言説からであった [Ramón y Rivera 1991]。一方、アフロ系文化は、「野蛮」の代名詞とされ、批判・攻撃の対象とされるしかなかった。かつて社会の最下層に位置した奴隷身分の人々がもたらした文化は、新興国家の誇るべき文化表象たりえなかったのである [Wright 1993:84-86]。

しかしながら、1930年代末から、突如として、アフロベネズエラ文化

「発見」の気運が高まる。その背景には、1920年代、アメリカ合衆国に起こったハーレム・ルネサンス運動、1930年代以降フランス語圏に開花したネグリチュード運動、そして同時期にキューバで興隆を迎えたネグリシモ運動、ならびにブラジルにおけるアフロ系文化評価の潮流などの影響があった。それは27年間続いた独裁者ゴメスの個人支配による強権政治が、彼の死によって終わりを告げた頃である。後継軍人政権の寛容政策により、開放的な政治・文化風土が実現した時期であった。

中央海岸地方の農村部、とりわけミランダ州バルロベント地方には、旧逃亡奴隷集落を母体に形成された地域社会があった。そこでは「純血」に近いとされるアフロ系住民が多数を占めていた。民衆宗教と儀礼、口承文芸や「タンボール」など、民俗文化にもアフロ系要素が強く保持されていた。文化的エリート達は、バルロベントの農村にアフロベネズエラ文化の、いわば「守るべき聖地」を見だし、同時に「ベネズエラのアフリカ村」としてエキゾチシズムも胚胎させつつ言説化していった。このような知的運動は、黎明期の政党活動や労働組合運動などポピュリスト的政治潮流とも結合し、アフロ系民俗の国民文化への統合を準備した [Guss 1993: 454 - 456, Charier 1997: 205 - 208]。

こうした動きは1945-48年、初めて成立した民主政権（いわゆる「3年政権」）期に、最初のピークを迎えた。1946年、教育省の諮問機関として国立民俗文化研究所が設置された。初代所長には、アフロベネズエラ文化「発見の父」と言われる、作家のファン・リスカーノ（1915年-）が就任した [Domínguez 1992: 40]。1948年2月ガジェーゴス大統領¹¹⁾就任式典における文化イベントの最大の呼びものは、リスカーノが制作した民俗芸能の公演であった。これはアフロ系文化が国民文化のパラダイムの中に公式に位置づけられたという意味で画期的な出来事となった [Liscano 1950: 162]。ガジェーゴス政権は早くも8ヶ月後、軍事クーデターに倒れ、その後ペレス・ヒメネス（1914年-）が6年間の独裁政権（1952 - 58年）を樹立したが、この間も民俗文化に関しては民政時の政策が基本的には踏

襲された [Domínguez 1992:47]。

1958年、軍民協同の反乱によりペレス・ヒメネスは亡命を余儀なくされる。民主行動党の創立者ベタンクール¹²⁾は亡命先から帰国し、「反軍政」「反共産主義革命」「民主選挙による政権交替の遵守」の理念の下、主要政党・労組・軍部の3者間の歴史的合意を取りつけた(プントフィホ協定)。かくして、選挙により政権を獲得したベタンクール大統領の下、石油収入に依存する多階級の社会民主主義という、現在まで続くベネズエラ独特の政治基盤が確立した [Lombardi 1982:234]。1960年、OPECが成立すると、「石油収入を国民各層に公平分配する」という、プントフィホ体制の特質 [Romero 1997:6] が、諸政策に反映されるようになる。公的イニシャティヴによって教育・文化・スポーツ施設が整備され、学校教育課程に民俗文化が取り入れられるなど、様々な民族主義的文教政策が実施された [Charier 1997:234]。

1960年代後半の国際的環境はまた、1940年代とは異なる形でアフロベネズエラ文化の大衆化を後押しした。アメリカ合衆国に起こった「フォーク・リバイバル運動」ならびに「黒人市民権運動」の影響が特に大きかった。カリブ海地域からは、サルサやレゲエなど、アフロ系民俗文化に根ざした大衆音楽が生まれ、草の根市民・若者・女性・少数民族など、弱者の主張が音楽を通じて表現された [Báez 1985:53-54]。こうしてベネズエラのアフロ系民俗文化は1970年代に一大発展期をむかえた。学術研究・芸術表現・文化産業・市民運動・文化行政など、これまでに各個に展開していた潮流が複合し、「タンボール」の音楽がマスメディアを通じて大量に流通する時代が到来したのである。70年代後半には文化産業による生産、マスメディアによる流通、大衆による消費という文化資本主義システムの中に、「アフロベネズエラ芸能」という商品が定着したのである [Charier 1997:342]。

一方、この時期国際的広がりをもったアフロ・カリブ文化は、政治性・商業性だけでなく、精神的なアフロ性回帰の傾向も帯びていた。サルサの

普及はサンテリーアの国際的拡散を伴ったし [Pollak-Eltz 1994],レゲエのブームは、リスナーにラスタファリズムへの共感をもたらしたのである [Barrett 1988: 194]。このような潮流は、ベネズエラにおいても様々な影響を与えたが、本論の事例と関係深い事象としては、タンボール音楽の普及にともなう聖人信仰儀礼の活性化が挙げられる [Megenney 1995] ¹³⁾。

1980年代以降の動きとして、「アフロベネズエラ主義者」と呼ぶべき新しい知識人の台頭が挙げられる。彼らは、それまでの文化的エリートと異なり、自身がアフロ系文化の盛んな地域の出身である。郷土史や民俗学の研究の傍ら、人種差別を告発するなど、マスメディアを通じて戦略的な主張を展開してきた。行政当局と地域社会間の様々な交渉・調停にあたるなど、社会運動家としての側面も目立つ。運動の性格上、アメリカ合衆国のアフロ系マイノリティ運動と交流し、その影響も受けている。代表的活動家としてはミランダ州バルロベント出身のヘスス・ガルシーア [García 1989], スリア州ボブレス出身のファン・デ・ディオス・マルティネス [Martínez 1990] の2人が挙げられる [Charier 1995: 211]。こうした運動家の中には、ガルシーアのようにアフロ系集団の民族自律を企図した者もあるが、実を結ぶには至っていない¹⁴⁾。

以上、概観してきたように、20世紀におけるアフロベネズエラ文化の軌跡は、「啓蒙すべき野蛮な習慣」が、「研究・保護されるべき文化財」へと再解釈されることから始まり、次第に国民文化の序列に組み込まれ、さらに「消費される文化商品」へと変貌し、今日ベネズエラ大衆のアイデンティティ表象として定位置を得るに至る過程であった。「国民文化創造」の文脈の中でアフロ系要素をめぐる言説が変化してきた道筋は、ベネズエラ文化が新たに「黒色化」する過程であった、ということも可能であろう [Megenney 1995, Charier 1997]。

次章では、特定地域社会における文化運動をとりあげ、これまでの論点を民族誌事例の中で検討する。

Ⅲ アフロ系文化運動に関する民族誌事例

1 サンミジャン民俗文化復興会

プエルトカベージョはベネズエラ中北部に位置するカラボボ州第2の都市（人口約14万5千人）である。カリブ海に面したプエルトカベージョ港は、国内随一の貿易港となっている¹⁵⁾。サンミジャンは、プエルトカベージョの周縁的コミュニティ（バリオ）として18世紀末に成立した。地域社会を形成した初期住民は「混血自由人」や「自由黒人」であったと考えられている。20世紀中頃まで市内の人々は、サンミジャンをはじめとする周縁地域を「野蛮」な「黒人」の住む「暴力的」地域と考えていた。サンミジャンは伝統的祭礼の盛んな地域として古くから知られていたが、太鼓芸能をともなう儀礼こそは、かつての市内の人々にとって「野蛮」の象徴に他ならなかった〔石橋 1998：37-43〕。

1976年2月、スポーツ指導者ヘルマン・ビジャヌエバ（1949年-）を発起人とする若者達によってサンミジャン民俗文化復興会 Grupo de Rescate Folklorico San Millán（別名：サンミジャン太鼓会 Los tambores de San Millán）が結成された。同会は「衰えつつあるアフロ系伝統文化の復興」「太鼓芸能を通じた青少年の教育感化」「地域芸能の全国的普及」という3つの目的を掲げ、「黒人芸能に対する偏見の克服ならびに地域社会に付与された“暴力”イメージの払拭」を目標とした〔石橋 1998：71-78〕。

ビジャヌエバは、前章で言及した「アフロベネズエラ主義」的知識人達と深い親交を保ち、彼らの影響を受けつつ文化運動を主導する思想を構築してきた。それは、次例のような本質主義的でアフロセントリックな自文化観として言説化されている〔石橋 1998：120-122〕。

「かつて植民者達は、黒人達に隷属を強制し、黒人本来の習慣を忘れさせようと手を尽くした。しかし、黒人の心から〔「タンボール」に対する〕愛着を根こそぎ奪いとることは、不可能だった。」〔San Millán 1982〕

「黒人達は、これ〔カトリックの聖人信仰〕を受け入れ、聖人を

信心し、祭日を祝うようになった。だが、心の裡では、いにしえのアフリカの神々を崇拜していたのである。」[San Millán 1996]

「真の〔文化的〕価値を矮小化する時代がやってきた。しかしサンミジャンは、このような動きに抵抗し、団結し、現代社会とは異なる価値規範を保持し続けている。」[San Millán 1996]

1960年代から70年代にかけて急激に展開したアフロベネズエラ文化の大衆化と軌を一にして、サンミジャンの文化復興運動は目覚ましい発展をとげる。20余年の活動を経てサンミジャンの芸能はプエルトカペーゴの民俗文化の中核と位置づけられるまでになった。サンミジャン民俗文化復興会はベネズエラ共和国文化庁 (CONAC) により「国民文化賞・民俗舞踊部門賞」を授与され、プエルトカペーゴ市の「文化財」として公的認定を受けるに至った (いずれも1995年度)。

サンミジャン民俗文化復興会の芸能集団としての成功過程は、個人的舞台体験の晴れがましい記憶とともに、活動参加者やその家族の内面に定着しており、それは地域住民の誇りと直結している。現在、地域の青少年にとってサンミジャン民俗文化復興会の活動は最も身近でかつ重要な自己実現の方途となっている。文化復興運動はアフロ系民俗文化を地域アイデンティティの表象として再構築したと言える [石橋 1998: 138-141]¹⁶⁾。

このように「黒人系」文化の復興を標榜する運動が、成功裏に展開してきた地域社会においては、地域住民の「アフロ系」意識はどのような様相を呈しているだろうか。

2 サンミジャンにおけるアフロ系アイデンティティ

1997年5月から7月にかけて実施したフィールド調査の中で、筆者は、サンミジャンの住民ならびに民俗文化復興会のメンバー52名の協力を得て、彼らを証言者とする面接聞き取り調査を実施した¹⁷⁾。本稿の論点との関連では、次のような内容の質問を用意した。

- ①現代サンミジャン地域社会の「人種」¹⁸⁾構成認識
- ②本人の「人種」的帰属意識

③本人の「人種」的出自意識

④アフロ系ベネズエラ人の歴史に関する知識

項目①に関しては、ほぼ全員が、現在のサンミジャンは、「色々な『人種』のごた混ぜ」liga de muchas razas から成り立っていると認識していた。「私たちは『黒人』の集団である」という回答は皆無であった。

項目②では、「あなた自身の『人種』は何なのか」と直截な質問をぶつけてみた。negro(a)と解答した人は6名、blanco(a)と回答したひとは4名であった。残りは、様々な表現方法で混血であると回答した。

ここで注意したいのは、第1に、raza という言葉は人々の意識の中で社会的「境界」を示す語として使用されていないということである。たとえば、親族内の混血の多様性に関する語りとして、「家には色々な raza がある。父は黒い肌 negro だが母は褐色の肌 morena だ。祖母はドイツ系でとても色白 blanquísima だ」[33歳女性、1997年6月7日]というような表現には頻繁に出会った。このような文脈における raza は、民族境界としての「人種」を意味するものではなく、個人の遺伝的・身体的特徴を表すにすぎない。

第2に、「私は negro である」と回答した人の中には、極めて幅広い肌の色の濃淡があるということである。いわゆる漆黒の肌から、日焼けした地中海地方の人程度まで、negro(a)と自称する人の形質的特徴は、非常にばらつきが大きい。逆に、第3者から見て非常に黒い肌の持ち主でありながら moreno(a)と自己認識している場合もあった。

次の項目③では「あなたの祖先に、黒人奴隷あるいはアフリカ人はいたか」という質問をした。「祖先にアフリカ人がいる」と答えた人は7名、「祖先に黒人奴隷がいる」という解答に至っては、わずか5名に限定された。特筆すべきは、前項②において自己を negro と同定した個人が、「自分の祖先には、アフリカ人も黒人奴隷もいない」と答えた例が、少なからず見られたということである。

続く項目④の歴史意識に関しては、植民地期の奴隷反乱のリーダーであ

るネグロ・ミゲル、アンドレソータ、ギジェルモ・リーバス、ホセ・レオナルド・チリーノス¹⁹⁾ならびに独立戦争における英雄的「黒人」のネグロ・プリメーロ²⁰⁾について知識を問うた。その結果、建国の英雄、ネグロ・プリメーロはほとんどの人から認知された。また、中高等課程の現行歴史教科書において独立運動の先駆者と位置づけられるチリーノスが若年層の一部に知られていた。しかし、残り3人物については、ごく少数の「知識人」以外からはまったく認知されないという結果であった。

この調査結果から、明らかなことは、サンミジャンの人々は、自分達を「黒人集団」とはみなしていないということである。彼らは「色々な『人種』のごた混ぜ」であり、サンミジャンには「白から黒まで様々な肌の色が混在している」と自己認識している。これはすなわち、「クリオージョ集団」の持つ「混血のアイデンティティ」に他ならない。

「黒人奴隷」「奴隷反乱指導者」など、明確な社会的境界をもって認識される歴史的「黒人」集団は、サンミジャンの「われわれ意識」にとり込まれていない。彼らの視野に入るのは、「国民的英雄」と認定された「黒人」＝ネグロ・プリメーロである。強いて「黒人奴隷」という歴史的存在を意識化すれば、それは彼らにとって「他者」として認識される。ある証言者（46歳男性）が語った次の言葉にそれは端的に現れている。

「タンボールをサンミジャンに伝えたのは、黒人奴隷達だが、今は、完全に俺達のものになっている。」[1997年5月13日]

3 「黒い血はタンボールの血」——文化表象としての negro

それでは、サンミジャンの人々にとって negro であることは、何を意味するのだろうか。いくつかの証言を引用しつつ検討してみよう。

サンミジャン太鼓会の男声ソロ歌手を務める A（32歳男性）の容貌は、筆者の目には、いかにも混血らしいと映る。しかし、A本人は「私は negro だ」と明言する。肌の色がさして黒くないのになぜ、negro なのか。このような問に対して A は、「肌の色は明るくとも、身体の中にいつもタンボールの血が流れているから、私は negro なのだ」と回答した [1997年

6月21日]。

ポルトガル移民一世を父に持つB（33歳男性）も、ベテランメンバーの一人である。彼の顔立ちは典型的なイベリア系のそれで、Bが「黒人」でないことは誰の目にも明らかであるように思えた。「私は肌の色から言えばblancoだが、私の身体の中には、黒い血sangre negraが流れている。祭り月の6月が来ると、私はblancoからnegroに変身する」とBは語る。
[1997年6月9日]

C（17歳女性）はサンミジャン太鼓会青年部を代表する優れたダンサーである。彼女も「肌は白いが、血は黒い」と自己認識する一人である。証言 [1997年6月7日] によれば、彼女の舞台姿を見た友人が「君には、ただの黒人よりはるかに黒い血が流れている」と評したという。

サンミジャン太鼓会創立メンバーのD（40歳男性）による、次の証言は、他者からの視線に言及しており、さらに示唆的である。

「いろいろな raza の寄せ集めである私達だが、サンミジャン太鼓会として集合するときには、世間から『サンミジャンの negro 達』と呼ばれる。」 [1997年5月13日]

以上の証言例から、サンミジャンにおける negro という概念を、次のように理解することができる。すなわち、サンミジャンの人々は、negro という用語を、次元の異なる2つの価値を量るパラメータとして兼用・混用しているのである。

第1のパラメータは形質的尺度であり、たんなる肌の色を示す。色が黒ければ negro、白ければ blanco と呼ばれ、その中間には moreno をはじめ、混血を表す肌の色の呼称がいくつか存在する。第2のパラメータは、文化的尺度である。タンボールの文化に自己同一化する度合が強ければ negro と自己認識し、そのような価値観が行動として常に表現されれば、周囲からも negro と認知される。「肌は白いが、血は黒い」という表現は、外見からは量れない文化的自己同一化の度合を、比喩的に強調するために使われるのである。

こうした民俗的文化観の根底には、本来タンボールの文化はアフロ系集団に帰属する(した)ものである、という認識がある。しかし4世紀にわたるクリオージョ化の過程で、民族集団としての「黒人」はベネズエラ社会の中で明確な「境界」を持たなくなり、黒い肌という形質的特徴とタンボールの文化への帰属に、ズレが生ずるようになった。それゆえ、現在のサンミジャンのように、太鼓の文化が地域社会にとって重要な肯定的価値をしめる「場」においては、アフロ系文化への自己同一性指標としての「血の黒さ」がことさら意識されるようになり、かつ積極的に表出されるようになったのであろう。

ところで、サンミジャンにおける普通の人々の、このようなアフロ系意識は、先に述べた文化復興運動指導者の本質主義的自文化観と、必ずしも矛盾するものではない。指導者のアフロセントリックな言説は「民俗文化」について語る文脈でのみ用いられており、社会的帰属集団を示す文脈で「私達」と「名乗る」際には、「住民」「市民」「国民」という用語が使用され、自己に民族的指標を付加することはない。端的な例は、設立登記書である [San Millán 1979]。集団を「法人」として公的制度的下に位置づける文書においては、アフロ系を示唆する用語は一度も使われていない。登記書において、サンミジャン民俗文化復興会は非営利市民団体として「プエルトカベージョならびにサンミジャンの地域社会」に帰属し、「全国の版図」において「郷土」の民俗文化を普及せしめることを目的とする団体、と自己規定されているのである。

サンミジャン民俗文化復興会がカラボボ州文化使節として海外公演を果たした際のプログラム [San Millán 1992] において、自らを「ベネズエラ国民」の文化的代表者と位置づけたり、創立20年にあたり運動を総括した文書 [San Millán 1996] において、運動が構築した価値を何の留保もなく「祖国ベネズエラ」に帰属せしめているのも、そうした意味できわめて自然のことと言える。

「文化と民俗芸能の分野において、プエルトカベージョ市民の、

そしてベネズエラ国民のアイデンティティのよりどころとなる旗印を、サンミジャン太鼓会は打ち立てた。」[San Millán 1992]

「[サンミジャンの太鼓が]、サンミジャンを代表するだけでなく、私達の祖国ベネズエラの文化的価値を〔内外で〕認知させることに寄与できたことは、私達の誇りである。」[San Millán 1996]

サンミジャンのアフロ系文化運動において表現される「黒人」negro という用語は、「私達サンミジャン住民」の民族境界を規定するものではなく、「私達」が継承する「民俗文化」の出自を示す用語なのである。「黒人文化」の復興を実現したサンミジャンの人々の社会的帰属意識は、ベネズエラにおける「混血のマジョリティ」であるクリオージョのアイデンティティに何ら矛盾なく包摂されうる性質のものなのである。

おわりに

本稿では、境界の捉えにくいアフロ系ベネズエラの民族範疇について論じてきた。現代ベネズエラ社会においては、「クリオージョ」という混血のアイデンティティに溶けこんでいるがゆえに、「アフロ系」という概念は社会集団の境界としては存在せず、文化の範疇として通用するという基本的特質を論じ、これを民族誌事例の中で検証した。20世紀における国民文化の「黒色化」、さらに、過去20年間におけるアフロベネズエラ文化の再活性化の文脈において、「タンボール」に代表されるアフロ系民俗は、地域文化を「創造」する言説の中核に組み込まれるようになった。筆者の調査事例では、文化復興運動の成果として、アフロ系民俗文化が地域社会にとって望ましい自己表象としての価値を獲得し、コミュニティ成員の自己肯定意識の源泉に位置づけられている。

しかしながら、アフロセントリックな言説を文化復興の語りとするサンミジャンのような事例でさえ、歴史上の「黒人奴隷」や反乱奴隷の英雄像が地域住民の出自意識の中に組み込まれるには至っていない。従って、このようなアフロ系文化運動の視野には、排他的に自律する「アフロ系コ

コミュニティ」として「名乗り」をあげることは含まれない。逆に、社会的排他性をともなわない文化運動であるがゆえに、第3者から見て白い肌の持ち主さえもがアフロ系文化に自己同一化することを、可能にしているのである。

最後に、2つの論点を補足しておきたい。第1に、ベネズエラ社会は、現代世界を席捲する民族問題と無縁な「混血の楽園」というわけではない。1958年以来民政が継続し、産油国として潤ったベネズエラには、大量の移民が世界各地から流入した。一世から三世まで含めた新移民コミュニティすなわち「バイナショナルーバイカルチュラル集団」は、総人口の約42%を占めるという [González 1991:130]。つまり、もはやクリオージョは圧倒的多数ではなくなり、ベネズエラはアメリカ合衆国的な多民族国家になりつつあるというのである。1980年代末より続く政治的・経済的不安の情勢下、新移民の中には急速に民族自律意識を高めた集団があり、このような集団の成員を当事者とした様々な社会的コンフリクトが、「民族問題」として語られる例が報告されている [González 1991:137-140]。

第2は、1992年以降アメリカ大陸各地で急激に高まりつつある「民族創生」運動との関連である [Hill 1996:3-17]。それまでクリオージョ社会に溶けこんでいたかに見えた多くの先住民コミュニティが、1992年を契機にベネズエラにおいても続々と名乗りをあげた [Mato 1995:23]。また、ベネズエラと似て、最近まで自律的マイノリティとしてのアフロ系集団は存在しないとされてきた隣国コロンビアにおいて、民族自律運動の隆盛を背景に多文化主義を盛り込んだ憲法改正が1991年に実施され、これを受けて太平洋岸地域のアフロ系住民が、少数民族として国会議席を獲得するに至った [Escobar et. al. 1998:198]。このような動きに鑑み、「アフロ系ベネズエラ人」という「民族創生」が起こる可能性を示唆する研究者も存在する²¹⁾。

筆者の調査事例に照合する限り、ベネズエラにおいて「アフロ系民族創生」を想像することは容易ではない。しかしながら、さらに多様な民族誌

事例を集積しつつ、ベネズエラ社会全体の変化を捉えながら、注意深く今後も考察を継続する必要があると言えよう²²⁾。

謝辞

本稿は東京外国語大学提出修士論文〔石橋 1998〕第1章ならびに第7章に補筆・編集を加えたものである。論文指導をいただいた東京外国語大学の鈴木茂（指導教官）、栗田博之、高橋正明の3先生、貴重な御助言をいただいた落合一泰（一橋大学）、黒田悦子（国立民族学博物館）両先生に、この場を借りて御礼申しあげます。

注

- 1) 1990年の国勢調査によればベネズエラの総人口は18,105,265人。Oficina Central de Estadística e Información de Venezuela (OCEI) [www.ocei.gov.ve] による。以下本稿における OCEI の出典は URL のみ記す。
- 2) Britanica (CD ROM Version 2.0), 大貫[1987], 中川[1985] など。
- 3) 本稿における「(民族)境界」ethnic boundary の概念は、Barth [1969] に依拠する。同論文 [10—15] によれば、行為者が相互行為を行う際に、民族のアイデンティティを用いて自己と他者を範疇化する限りにおいて、民族集団は組織される。この立場によれば、文化の「中身」よりもむしろ、集団が自己規定するための排他的「境界」こそが「民族」研究上の基本問題となる。
- 4) 本稿における「民族」「名乗り」「名づけ」の概念は内堀 [1989] に依拠する。これによれば、「民族」とは全体社会（国家）と対面的共同社会の中間に位置する範疇であり、第3者からの「名づけ」によって成立する。国家からの「名づけ」に対する共同社会からの応答が「名乗り」である。内堀、Barth らの論点をふまえた「民族」関連概念の理論的考察は名和 [1992] に詳しい。
- 5) Bastide は、アフロアメリカ社会を、アフリカ型の社会的要素が強く残存する「アフリカ系」africaine（例：キューバ）ならびに、文化変容の著しい「黒人系」noire（例：アメリカ合衆国）とに2類別した [1967:46 - 47]。しかし、現実には両者の中間に「アフリカ性」についての無限の階調が存在し、明確な線引きは不可能である。
- 6) 冒頭に挙げた統計の数値は、18世紀末から19世紀初頭にかけて実施された「カスタ統計」が、無批判のまま孫引きされ続けた帰結ではないかと筆者は推測する。たとえばこの時期にベネズエラを訪れ、博物学の大著を著したフ

- ンボルトは当時の「カスタ統計」に基づき次のようなデモグラフィを記述している。「クリオージョ系白人：200,000人(25%)；ヨーロッパ系白人：12,000人(2%)；混血：406,000人(51%)；インディオ：120,000人(15%)；黒人：62,000人(8%)；総人口800,000人(100%)」(López[1988]の引用による。パーセンテージ算出は筆者)。
- 7) 1992年の「先住民センサス」Censo Indígena 1992によれば先住マイノリティは38集団、約32万人居住している [www.ocei.gov.ve]。
 - 8) 今世紀以降降入したヨーロッパ系、アジア系、ラテンアメリカ系移民に関し、一世から三世までを含めた集団を指す。内訳は「外国出生者」約6%、「不法滞在者」推定8%、両者の二世、三世推定28% (合計42%)とされている。
 - 9) スペイン語ベネズエラ方言には、これとは別の negro(a)の用法がある。2人称呼称としての用法で、「親愛の情をこめた口語表現」[Tejera 1993]である。重要なのは negro(a)と呼ばれる対象が、第3者から見て黒い肌の人に限定されない点である。金髪・碧眼・白い肌の人も negro(a)と呼ばれうる。ベネズエラ人のアイデンティティの中に、アフロ系意識が共有されていることの証左と言えよう。
 - 10) Acostaによれば、現在ベネズエラの国民的民話となっている「ウサギおじさんと山猫おじさん」*Tío Conejo y Tío Tigre* は、動物の「いたずらもの」が活躍する、典型的西アフリカ起源の民話だという [1980:268]。この民話は、「黒人」の乳母 *nana negra* の語りによって、植民地期にすでに上層「白人」層にまで拡散していたという。
 - 11) Rómulo Gallegos (1884—1969年)。普通選挙で選ばれたベネズエラ初の大統領。民主行動党創立者の一人。20世紀ベネズエラを代表する文学者。小説『ボブレ・ネグロ』*Pobre Negro* (1937年) はベネズエラ・ネグリスマ文学の代表作とされる。
 - 12) Rómulo Betancourt (1908—1981年)。大統領在任1959—1964年。「ベネズエラ民主主義の父」といわれる。
 - 13) 近年の聖人信仰儀礼の活性化について、筆者は別稿「聖像はいかにして聖人となるか——アフロベネズエラ文化におけるサン・ファン信仰」(仮題)を起草中である。
 - 14) 筆者とのインタビュー (1996年10月18日) による。
 - 15) 総輸入の約70%、輸出における非石油部門の65%が、同港を通じて行われている [Instituto Puerto Autónomo de Puerto Cabello, www.puertocabello.org]。
 - 16) サンミジャンの文化運動そのものについての詳しい分析は、石橋 [1998] を参照せよ。また、同論文中の考察に基づき現在筆者は次の2稿(仮題)を起草中である。「文化創造運動における真正性保証の指針」、「イメージの政治

学——『地主国家』ベネズエラにおけるアフロ系民俗文化運動のアイデンティティ戦略」

- 17) この調査に基づく民族誌の詳細は石橋 [1998] を参照せよ。以下証言の引用に際し, [] 内に証言者の年齢, 性別, インタビュー実施の年月日を記す。
- 18) 質問に際しては, あえて「人種」*raza* という語を用いた。その理由は, これが, ベネズエラの大衆層の間で「民族」「人種」「エスニシティ」等を示す用語として, もっとも一般的に使用されているからである。他の用語, たとえば民族集団 *grupo étnico* などは, 学知的言説に慣れ親しんでいない被調査者からは, 理解されない可能性が大いにあるからである。なお, これ以降本稿の論述にあたっては日本語の訳語による先入観を排除する意図から, *raza*, *negro*, *moreno*, *blanco* といった用語を部分的にスペイン語で表記した。
- 19) Negro Miguel [Miguel Guacamayo]: 1552年, プリーア銅山においてベネズエラ史上初の大規模奴隷反乱を起こす [Acosta 1967]。Andresote [Andrés López del Rosario]: 1731年, ギブスコア会社ならびに植民地当局に対して反乱を宣す。連勝の末, 逃亡 [Brito 1985]。Guillermo Ribas (sic): 1767年, 奴隷身分から逃亡。バルロベントにクンベを築き, 4年間にわたり当局とゲリラ戦を継続 [Acosta 1967] José Leonardo Chirinos: ハイチ革命の影響を受け, 1795年「奴隷制廃止」を要求して反乱。独立運動の嚆矢と評価される [Brito 1985]。
- 20) Negro Primero [実名 Pedro Camejo]: 独立戦争で活躍した陸軍中尉。国粋主義文学の中で, 国民的英雄とされた [Troconis 1988]。
- 21) エステバン・E・モソンジ (人類学・言語学者) [筆者とのインタビュー, 1996年10月15日] ならびにダニエル・マト (人類学者) [筆者とのインタビュー, 1997年5月25日] らが, アフロベネズエラの「民族創生」について「ありうる」とする見解を表明している。
- 22) 本稿ではあえて論じなかったが, ベネズエラ社会には, 肌の色やアフロ的形質特徴をスティグマとして捉えた根強い「黒人」差別も存在する。アフロ系マイノリティが自立・排他的社会集団として存在しない社会における「黒人」差別は, 非常に把握しにくく, これまで社会科学の議論の対象とされることが少なかった。ここでは先駆的研究成果として Montañez [1993] を挙げるにとどめる。

参考文献

Acosta Saignes, Miguel

1967 *Vida de los esclavos negros en Venezuela*. Valencia: Vadell Hermanos Editores.

- 1980 “Elementos indígenas y africanos en la formación de la cultura venezolana.” En *Estudios en antropología, sociología, historia y folclor*. Caracas : Biblioteca de la Academia Nacional de la Historia, pp. 227-281.
- Aizpurua, José María
- 1988 “Esclavitud : 1810-1854.” En *Diccionario de Historia de Venezuela*. Vol. 2, Caracas : Fundación Polar.
- Báez, Juan Carlos
- 1985 *El vínculo es la salsa*. Caracas : Dirección de Cultura de la Universidad Central de Venezuela.
- Barrett, Leonard E.
- 1988 *The Rastafarians*. Boston : Beacon Press.
- Barth, Frederik
- 1969 “Introduction.” In F. Barth, editor, *Ethnic Groups and Boundaries : The Social Organization of Culture Differences*. Boston : Little Brown and Company, pp. 9-38.
- Bastide, Roger
- 1967 *Las Américas Negras : Las civilizaciones africanas en el Nuevo Mundo*. Madrid : Alianza Editorial (Traducción : Patricio Azcárate).
- Brito Figueroa, Federico
- 1979 *Historia económica y social de Venezuela*. Vol. 1. Caracas : Ediciones de la Biblioteca, Universidad Central de Venezuela.
- 1985 *El problema tierra y esclavos en la historia de Venezuela*. Caracas : Ediciones de la Biblioteca, Universidad Central de Venezuela.
- Chacón, Alfredo
- 1983 *Poblaciones y culturas negras de Venezuela*. Caracas : Instituto Autónomo Biblioteca Nacional.
- Charier, Alain
- 1997 “La culture afro-vénézuélienne : déclin et renouveau, le cas du Barlovento.” Thèse de Doctorat, Cedex, Presses Universitaires du Septentrion.
- Chen, Chi-Yi
- 1968 *Movimientos migratorio en Venezuela*. Caracas : Instituto de Investigaciones Económicas de la UCAB.
- Domínguez, Luis Arturo
- 1969 *Fiestas y danzas folklóricas en Venezuela*. Caracas : Monte Avila Editores.
- 1992 *Los estudios del folklore en Venezuela*. Caracas : Ediciones del Con-

- greso de la República.
- Escobar, Arturo, Libia Grueso & Carlos Rosero
- 1998 "The process of black community organizing in the Southern Pacific Coast Region of Colombia." In Sonia E. Alvarez, Evelina Dagnino, and Arturo Escobar, editors, *Cultures of Politics, Politics of Cultures*. Boulder : Westview Press, pp. 196-219.
- Ferry, Robert J.
- 1989 *The Colonial Elite of Early Caracas : Formation & Crisis 1597-1767*. Berkely : University of California Press.
- Fuentes, Cecilia y Daria Hernández
- 1988 "San Juan Bautista en Venezuela." *Revista Bigott* 12.
- García, Jesús.
- 1989 *Contra el cepo : Barlovento en la época de cimarrones*. Caracas : Editorial Lucas y Trina.
- González Ordosgoitti, Enrique Alf
- 1991 "En Venezuela, todos somos minoría." *Nueva Sociedad* 111.
- Guss, David
- 1993 "The selling of San Juan : The performance of history in an Afro-Venezuelan Community." *American Ethnologist* 20-3.
- Hill, Jonahant D., editor
- 1996 *History, Power, and Identity : Ethnogenesis in the Americas, 1492-1992*. Iowa City : University of Iowa Press.
- 石橋 純
- 1998 「港町・バリオ・タンボール——ベネズエラ共和国プエルトカベージョ市サンミジャン地区におけるアフロ系文化復興運動」東京外国語大学大学院 地域文化研究科 博士前期課程修士論文。
- 工藤多香子
- 1998 「文化をめぐる戦略と操作の相克——キューバ・サンテリーアの儀礼太鼓バタを中心として」『民族学研究』62-4。
- Liscano, Juan
- 1950 *Folklore y cultura*. Caracas : Editorial Avila Gráfica.
- 1973 *La Fiesta de San Juan Bautista*. Caracas : Alfadil Ediciones.
- Lombardi, John V.
- 1971 *The Decline and Abolition of Negro Slavery in Venezuela 1820-1854*. Westport : Greenwood Publishing.
- 1982 *Venezuela : The Search for Order, the Dream of Progress*. New York : Oxford University Press.

López, José Eliseo

- 1988 “Criollo”. En *Diccionario de Historia de Venezuela*. Vol. 3, Caracas : Fundación Polar.

Martínez Suárez, Juan de Dios

- 1990 *El gobierno de chimbánqueles*. Maracaibo : edición privada.

Mato, Daniel

- 1995 *Crítica de la modernidad, globalización y construcción de identidades*. Caracas : Universidad Central de Venezuela.

Maximilien, Louis

- 1945 *Le vodou haitien : rite radas-canço*. Port-au-Prince : Imprimerie Henri DesChamps.

Megenney, William W.

- 1992 “El español de los cumbes de Barlovento (Venezuela) y sus posibles vestigios afronegroides : la filtración por la creoloidización.” *America Negra* 3.
- 1995 “Environmental causes of the Venezuelan de-africanization and its recent reversal.” *Journal of Caribbean Studies* 10-3.

Montañez, Ligia

- 1993 *El racismo oculto en una sociedad no racista*. Caracas:Fondo Editorial Tropycos.

Minority Rights Group, editor

- 1995 *No Longer Invisible. Afro-Latin Americans Today*. London : Minority Rights Publications.

Murphy, Joseph

- 1993 *Santería : African Spirits in America*. Boston : Beacon Press.

中川文雄, 松下洋, 遅野井茂雄

- 1985 『ラテンアメリカ現代史Ⅱ』世界現代史34, 山川出版社。

名和克郎

- 1992 「民族論の発展のために——民族の記述と分析に関する理論的考察」『民族学研究』57-3。

大貫良夫 (編)

- 1987 『ラテン・アメリカを知る事典』平凡社。

Pollak-Eltz, Angelina

- 1994 *Religiones afroamericanas hoy*. Caracas : Editorial Planeta.

Ramón y Rivera, Luis Felipe

- 1991 “Estudios del folklore venezolano (panorama).” *Anuario FUNDEF*, año II.

Romero, Anibal

- 1997 “Rearranging the deck chairs on the Titanic : the agony of democracy in Venezuela.” *Latin American Research Review* 32-1.

San Millán (Grupo de Rescate Folklórico San Millán)

- 1979 “Acta constitutiva del la asociación «Grupo de Rescate Folklórico San Millán».” Puerto Cabello, 9 de enero.
- 1982 “Presentación para el primer encuentro regional de dirigentes de agrupación por el rescate de la cultura negroide.” (mimeografiado) : Puerto Cabello, 8 de mayo.
- 1992 “Tambores de San Millán : puro tambor puro.”(programa de mano del concierto en el Teatro Antonio Mella, en la Habana, Cuba), 10 de junio.
- 1996 “Tambores de San Millán” (libreto inédito mimeografiado de reseña de Tambores de San Millán), Puerto Cabello.

Tejera, María Josefina, editor

- 1993 *Diccionario de venezolanismo*. Caracas : Universidad Central de Venezuela, Academia Nacional de Lengua, Fundación Edmundo y Hilde Schnoegass.

Troconis de Veracochea, Ermila

- 1988 “Pedro Camejo”. En *Diccionario de Historia de Venezuela*. Vol. 3. Caracas : Fundación Polar.

内堀基光

- 1989 「民族論メモランダム」 田辺繁治編（編）『人類学的認識の冒険——イデオロギーとプラクティス』同文館, pp. 27-43.

Wright, Winthrop R.

- 1993 *Café con Leche : race, class, and national image in Venezuela*. Austin : University of Texas Press.